

「名前のない星」プロジェクト  
第一回公演

『殺意（ストリップショウ）』

作・三好十郎  
脚色・叶和泉

ひとり芝居である。

時は敗戦を経て、「もはや戦後ではない」と言われ始めるころ。  
場所は日本。東京。

この舞台には振袖が四着と、手紙、黒紐、懐剣が出てくるが、それぞれ象徴としての役割がある。

振袖①……徹男

振袖②……幻想の中の先生（白無垢）

振袖③……右翼に転向した先生

振袖④……左翼に転々向した先生（喪服）

手紙……兄の思想。

黒紐……先生の思想。墮落させる蛇。

懐剣……母。

舞台奥に衣桁が置かれている。

衣桁の後ろには箱（椅子）がひとつ隠されている。

衣桁には振袖②と懐剣がかかっている。

舞台の正面と客席側の柱の間にはカーテンレールが奔っており、白いカーテンが柱に括りつけられている。

舞台上手の壁には振袖をかけるための棒がついている。

客入れの音がゆっくりと止む。

少しの静寂。

衣桁の後ろから女が顔を出しゆっくりと歩き出す。

女は振袖①を着ている。

舞台中央前まで来たら立ち止まる。

そして、

今でも、夢の中までも

我とわが身をかきむしるのは

死んでもいいほど思っていたあの人に

私が私をあげなかったこと

打楽器だけのダンス曲。

曲に合わせて踊り出す。

強い足踏みをひとつ。

曲が止まる。

ありがとうございます

今晚はこのわたくし、緑川美沙が

このステージに立つ最後の夜でございます

ずいぶん長い間、ここで私は踊った

汗を流したり、涙を流したり  
——いろいろの事がございました  
それを思うと今、踊りながらも  
悲しいような、うれしいような  
胸がいつぱいになったのでございます

世の中は広うございます  
ひとたび、ここから立ち去ってしまえば  
私の姿など世の中と人々の間に吞まれてしまつて  
二度と再び、あなたがたの眼には  
ふれないかも知れません  
しかし、時には思い出してくださいまし  
緑川美沙という、こんな女がいた事を

くるりと後ろを向き、腰ひもを解く。

せつなくて、やりきれなくて、駆け出したくなり  
じれてじれてじれぬいて、  
しまいには裸かになつてふるえます  
それが恋

恋は人をハダカにいたします  
私もハダカになりました  
その話をいたしましょう  
と申しても、たかの知れたこれだけの女一人  
ただもう身体と心の裏表から隅々までを  
キレイきたないのお構いなしに  
着ているものをぬいでぬいで脱ぎ切つて  
御存じのストリップ——皆さま見飽きていらつしやいませうが  
まあ、しばらくごしんぼう下さいまし

その人は徹男と言いました  
昔の私の先生で、名前をいえば  
多分みなさまもいくぶんは御存じの  
進歩的な社会学者の、弟でした  
仮に山田としておきます

山田先生……山田教授……の弟の  
山田徹男

口数のすくない静かな人で  
それでいて、いつでも怒っているように激しいものを持っていて  
顔色の青いのも、内から燃えて来るものを、  
押えているせいです

ただ眼だけが時々やさしい眼になって  
濡れたようになるのです……

いいえ、あの人の顔や姿を語るのはやめましょう

艶のある音楽。

女、ストリップをはじめ。

振袖①を脱ぎ捨てる。

その瞬間、ふと我に返る。

私としたことが、ツイのぼせあがってしまいました  
こんなことをやっていたのでは、話が進んでいきません  
形容ぬきの電報式に申しませう  
ごめんあそばせ！ ほっ

女、振袖①を舞台上手の棒にかける。

衣桁の後ろから箱（椅子）を取り出し、そこに座って語りだす。

私は、南の国の小さな城下町の生れです

裁判所にとめていた父を早く失い

旧藩士の家から出た母のもとで一人の兄といっしょに育ちました

兄は、学生時代に左翼の運動に熱中し、

ケイサツにつかまって二年の刑を受けて、

出て来た時はスツカリ胸を悪くして

それから三年寝て暮した末に

戦争がはじまって間もなく死にました。

兄は私を、しんから、かわいがってくれました

病気にたおれて、もう命の長くないことを知っているために

自分の意志を継いでくれる者に

妹の私をなそうとしました

病床で熱と火のために目を輝かし、顔を赤くしながら

女学生の私を教え叱り言いふくめます

すべてが何の事やら私にはわかりませんが、

兄のいう通りにしたのです

なぜなら私は兄が好きでした。

兄のいう通りに勉強することが

兄を喜ばせ、兄を元気づけ

兄の命を半年でも一年でも引き伸ばすことができるならば

どんな事でも私はしたでしょう

それに、兄の思想は悪いものには思えませんでした

それは何よりも先ず、自分一人の利益のためでなく、

働らいている貧しい、たくさんの人々を

幸福にするための思想でした

思想家として兄はホンモノでした  
それを身をもって生き抜いた  
そして、今でもそう思います  
それが私を動かすと同時に  
母さえも動かしたのです

母はただ物がたい家に生れ育って  
厳格な父のもとにとつぎつかえて  
まだ若くして夫を失い、その遺児の兄と私を  
僅かばかりの遺産を細々と引き伸ばしながら育てて来た

立ち上がる。

衣桁にかかっている懐剣をとる。

ただ一つ人間に大事なものはミサオ——節操というもので  
それさえあれば人は人としてどのような場合でも

恥じることはないと思っており、おこなって来た女です  
それだけに、兄の思想を遂にわからず  
牢屋に入った病気になる兄の身の上を

ただ動物の母のように身を細らせて心配するだけでしたが  
次第しだいに、兄の思想に対する一徹さに

自分の息子は、すくなくともハレンチな無節操な  
腰抜けではない、と思うようになりました

おしまいの頃は、自分だけの胸の中では  
母親としての誇りのようなものを感じながら  
兄をみつめておりました

そのようにして三人が

からだを寄せてあたため合いながらの暮しが流れていたのですが  
私の十七歳の春のくれに

「東京に行け」と兄が言い出したのです

私自身、しばらく前から母と兄との三人暮らしに不足は感じないながらも  
なんとなく自分にはもつと見るべき世界が

どこかにひろがっているような気がしていました  
それは幼い少女の、あてもないあこがれと

兄が私のうちにかき立てた

人と生れたからには、自分のためにも人のためにも

何かの事をしなければならぬという気持との

いっしょになったものでした。

兄は兄で自分の後つぎを私にさせる気があります

その上に、私の中にある芸術的な素質を伸ばしてやりたいと思ったようです  
それには、東京だ。

そのころ既に満洲事変が中国との戦争状態に突き進んで行っていた頃でもしかすると、もっと大がかりな状態にひろがるかも知からない時でしたが、幸い東京には、兄の高校時代の先輩で

思想的にも兄を導いてくださった

山田先生がいて、いつさいを引き受けてくれると言います。

「山田先生」は振袖②に向かって言う。

母は、最初は反対していましたが

しまいに寂しそうに、承知しました

母は私が東京へ立つ前の晩に

裏の座敷で膝と膝とを突き合せるように坐らせて

「男であれ女であれ人間は、

いつでも、どこでも初一念を忘れてはなりません、

なんでもよいから、あなたがホントにしたいと思うことをおやりなさい

一番大事なことはミサオです

いったんこうと思いきめてはじめた事は

どんな事があっても、やりとげる

それが真人間のすることです。忘れないよう、

お母さんがあなたに、これをあげます」

そういつて、母は懐剣をひとふりくれました

母が父のもとに嫁入りする時に

母の母からもらった物で

母は母らしい、ふるめかしい事をするものだと

少しコッケイなように思っただけです

その時の母の悲しそうな

涙のかれた眼を思い出したのは

ズツとあとになってからです。

戦前の東京駅の雑踏の音が一瞬だけ流れる。

出していた箱（椅子）と懐剣を片付けながら、

十九歳の少女になって、

東京！

長くつづいた日華事変が

次第に更に大きな戦争にひろがりそうな気配で

何もかも不気味に一方に傾きかけて

二・二六の事件でそれが爆発した頃で

東京のありさまも荒れすさんで来てはいても

九州の田舎から出て来たばかりの女学生に

それは、ただギラギラと光りくるめき

音を立てて、ひしめき、はなやぐ渦の町です

しばらくは、ただノボセたように  
何を見ても何を聞いてもカーツとして  
町を歩くと、よく鼻血を出しました

山田先生一家は快く私を受け入れて  
もとの女中部屋をあてがってください  
お子さんのめんどろを見たり家事の手伝い、使い走りに  
しばらく過した後で

その頃先生が講師をなすっていた夜間の私立大学の  
文科の聴講生に編入してもらって  
勉強できるようになりました、

若い田舎者の私は  
朝から晩までコキ使われても、苦になりません  
何よりも、夜だけでも勉強が出来るのです  
時々先生の手伝いとしてカバンを持って

教室や講演会へお伴をしたり

先生の書齋で原稿の清書をさせられたりするのも  
おそれ多いような、誇らしいような、気がします  
どんな物を見ても、言葉を聞いても

私には、すべて光りが強過ぎて  
理解することはできませんでした  
理解しないままに、のみこんだのです  
とにかく私はガツガツと

ただガツガツと、それがなんだか自分では知らないで  
尊敬する先生の言葉をのみこみました

先生はホントにえらい人でした

奥さんも立派なインテリで

明るい、積極的な、世話好きな方でした

二人のお子さんも身体がすこし弱くて、わがままだけど  
陽気なお子たちです

先生の弟の徹男という方は

大学から帰ると、直ぐに自分の書齋に入って

めったに出て来ず、出て来ても、ほとんど口をきかず  
いつも、何かをジッと見つめているような人でした

それが家族の全部で  
みんな私によくしてくださいます

私は先生一家を心から尊敬し愛しました

私は有頂天になって、兄にその事を書いてやりました  
兄も非常によくこんで

(懐から手紙を取り出して)

「山田さんは僕が信じていた通り、真実の進歩的思想家です  
今、時代は悪い  
すべての事は一方へ一方へ歪められるばかりで  
良いものは追いやられ、おさえふせられ  
自由はほとんど残っていない  
今後ますますひどくなる  
しかし絶望というものは、われわれの行く手には存在しない  
希望を持ちなさい、美沙子！  
お前は山田さんの所に居られて、幸福だ  
山田さんに教えてもらい、それを守り、見ならいなさい  
そして懸命に学び、正直に考えなさい」  
(手紙を戻す)

今の美沙に戻って、

かわいそうに！　かわいそうに！  
死にかけながら、兄はそう思っていたのです

振袖②を衣桁から外し、地面に落とす。

下から振袖③が出てくる。

振袖③の横には太い黒紐がぶら下がっている。

その紐を左手の薬指にくぐらせたあと、左手に巻きつける。

そうです、山田先生は転向者だったので  
兄と同じ頃につかまって、  
もう一度つかまるのが怖いために  
自分の主義をだんだんにくずして行った  
日本人の一人として同胞が戦争に駆り出されて戦い死んでいるのを見ているうちに、  
それまでの左翼の理論だけでは割り切れないものをヒシヒシと感じ出して  
この民族の生ける一人として自分の血は  
あらゆる理論に優先すると知った  
先生が信念をもって立っている姿は美しかった  
先生はその時、ホンモノだったので  
私たちは打ち仰ぎ引かれて行った  
ただ先生の全体主義の思想は  
左翼の理論の上に咲いた狂い花だった  
木に竹をついだものだった  
そして先生と私たちとの違いは  
先生には、それがそうだと、わかっていた  
私たちには、わかっていなかった

雷雨の音



雨足がどんどんと強くなる。

愚かといえば愚かです  
しかし、誰が愚かでなかったでしょう？  
田舎出の二十にならぬ娘でした  
理解はせずに、ただ飲みこんだのです  
私が悪い

私に責任があります  
しかし、私の何が悪いのでしょうか？  
私にどんな責任がありますか？  
では山田先生が悪いのか？  
しかし先生に悪意はありません  
先生は誠実に、本気になって  
自分の信じている所を私につきこんだだけです

静かに思い返して見ようではありませんか  
今そのことを話す時に人々は  
あの頃の若者たちが、軍閥からだまされていたと言う  
しようことなしにイヤイヤながら戦争に引っぱり出されていたのだと言う  
たしかに、そういう人も、たくさん居りました  
しかし、そうでない人も、たくさん居たのです  
国民が国家が民族が、そして世界が  
それを望み必要とするならばと  
思い決していさぎよく

笑いながら行った人も居たのです  
愚かだと、かしこい人は言うでしょう  
罪有りと、罪なき人はとがめましょう  
ただそんな人が、たくさん居た事は事実です  
私はただ事実を曲げることが出来ないだけです  
そして、私も戦争にこそ行きませんけど  
そんな人間の一人でした  
徹男さんもそんな人間の一人でした  
他の人たちもそうでした。  
山田先生の影響の中で。  
山田先生の思想を、私どもの身体で実践し生かすことで  
私どもを罰してください

雷が落ちる音。  
雨があがる。

上手に壁にかかった振袖①に向かって、

徹男さんは学生でしたが

兄さんの山田先生とちがって  
沈うつな位に控え目な人がらでありながら  
国の運命を深く心配している  
口には言いませんが、その頃から  
自分一身を日本の運命の最前線に  
投じたいと思っていたようです。  
研究会に出席していても隅の方に坐って  
山田先生や、ほかの人の烈しい言葉を  
黙々として聞いているだけで  
ふだんもそれらしい事は何一つ言いません。  
いわないけれど、私にはわかりました  
なぜわかったのだろうか？

いつしよの家に住んだのは半年ばかりの間で  
その半年の間も、家事の手伝いやお子さんの世話と勉強で私は忙しい  
徹男さんも学校があり、それに兄さんの紹介で親しくなった青年将校や  
革新団体の若い人々との集会などにも出ていたようで、暇はない  
私とあの人が顔を合わすのは毎週二回の研究会の席上か  
偶然に廊下ですれちがう時ぐらいです  
話といえど堅苦しい思想の事や社会の事や時世のこと  
ただの雑談を交したことは数えるほどしかありません  
それよりも、この私の若さです  
若さは強く一方の方へばかり傾けば傾いて行くほど  
蓄は固くきびしく引きしまり、  
外に開くのを忘れたようになっていた  
いえいえ、外に開きたい無意識の本能が強ければ強いほど  
内へ内へと烈しく引きしまって行く。

東京に来てわずか半年後には、山田家を出て  
劇団の女優になって働いていました  
山田先生のお弟子さんの一人が  
Gという劇団の指導者であった関係で  
その劇団に入って勉強をはじめたのです  
もうその頃は戦時状態はますます焼けひろがって  
もうどうしても東洋だけの問題としては片づかない事がハッキリして来た頃です  
軍部や政府の手で  
文化方面のすべての事から自由がうばわれ  
私の入ったG劇団も、本式の公演をやめてしまつて  
工場や農村や軍の施設への慰問のための  
移動公演などを主としていました  
それでも、劇団の中だけには自由で進歩的な空気がありました  
そして何よりもそこには

まだ芸術らしいものが有ったのです。  
山田先生から吹き込まれた理屈を  
実際に実践するのは此処だとばかり  
私は夢中になってシバイをしたのです

少女に戻って、

シバイのたびに徹男さんは見に来てくれます  
見に来て、ただ見るだけで  
ガクヤに一度も来ようとはせず  
言葉もかけず、ただ遠くから私を見て  
軽く頭を下げただけで帰るのです  
あの人が私のシバイを見に来るのが、なんのためだか  
私にはわかりませんが、わかるような気もします  
わからないなりに、うれしいのです  
自分でも知らぬ間に、私は時々  
徹男さん一人のためにシバイをした事に後で気づいて  
ガクヤの鏡の中で真っ赤になったことがある  
そうしては、山田先生の所の研究会の日が来ると  
かえって、コツコツにまじめにこわばった心で  
そのくせ、どこか心の隅ではイソイソとしながら出かけて行っては  
山田先生の話や  
右翼の革新団体からやって来た講師などの  
噛みつくような議論に聞き入りながら、  
徹男さんと眼が逢うと  
両方で怒ったように、しばらくジツと見合っていて  
やがて話し手の方を向いてしまう。

まったくイキモノはホントに愛し合うと  
お互いに、なんとオカシな事をし合うのでしょうか！  
相手を抱こうとして、一番遠くへはね飛んだり  
相手にキスをしようとして、相手を喰い殺してしまったり  
恋の最中の男と女の姿は  
互いに憎み合って闘っている姿に一番似るのです  
そして、あの人と私は  
こんな眼つきをして互いに見合ったのです

間……

ごたいくつ、こんな話？  
長々と語られる他人の身の上話です  
ごたいくつに違いありません

音楽を、どうぞ！ アレグロ・ヴィヴァーチェ！

アツプテンポの音楽。

真珠湾攻撃の爆撃や飛行機音が流れる。

舞台を降りて、水を飲む。

ここから舞台下での演技。

真珠湾が来た

大戦が始まった

国中わき立った

今、あの時のことを振りかえって日本人の誰もかれもが

くやんでも、くやみたりない悔恨と否定と、

国民に知らせずにそれをした軍部への怨みを言う

たしかに、それはそうだろう

しかし事実そのものを振りかえって見よう

今こうなった気持から事実までをも曲げて

自分で自分にウソをつくほど。恥知らずにはなるまい

客席すれすれを歩きながら、

そうだったのだ

大きな恐ろしい決定の前で

国民の大部分が「ヤルゾ」と思った

こうなったら、しかたがない

負けるわけには行かないと思った

これに負けたら日本は亡びる

亡びたくなければ勝つ以外にないと思った

誰にしる、心から、残りなく喜び勇んで

開戦万歳を叫んだ人は居なかったが

それぞれの心々に憂い恐れためらいながら

しかしそれらすべてを引くるめて投げ捨てて

前へ踏み出すほかに途はないと思った

悲しい、いじらしいそのような思いが

そっくりそのまま、気ちがいじみた戦争屋たちの

作り上げたワナにはまる事とは知らないで

国中は、歯をかみしめて、総立ちになったのだ

ごく僅かの人たちが「しまった」と思った

もっと少数の人たちが「いけない」と思った

だがそんな人たちは何も言わなかった

言えもしなかった、言っても聞きはしなかった

だから居ないと同じだった。

すべての人が総立ちになって

大空に血の色を見てふるい立った  
すべての人が頭を垂れて戦勝を祈ったことを思い出して見るがいい  
私たちもそうだった  
私もそうだった

当時のラジオのニュースがノイズのように流れる。  
舞台に戻る。

私にとっては先生は文字通り  
導きの光であった

私の兄は大戦が始まると間もなく九州で死んだ  
母は薄暗い家に一人で残された  
あわただしい時代の波風は

私が兄の死に逢いに行くことも許さなかった、  
シミジミとその悲しみを味わっている暇もなかった、

私の胸の中の兄の席は空虚になったが、  
それだけに、そのぶんまでも先生に向けて

私は先生を崇拜し愛した

世の中も男も知らぬ、一本気の  
熱情だけは人一倍に激しい十九歳の女が

心から人を尊敬するのに

その人を愛さないでいられようか？

尊敬と愛とを別々に切り離して

それぞれハッキリ見きわめることが出来ようか？

研究会の会員や劇団の人たちが

私のことを「山田先生の親衛隊」とからかって

私はまじめに心の中で

山田先生にマサカの事がある時は

身をタテにして先生を守る気になっていた

その事で一度、先生の奥さんが私に嫉妬されたことがある

そして徹男さんまでが、兄さんを嫉妬した事があったと言うのを後で知った  
かわいそうな、かわいそうな徹男さん。

徹男さんは既に数カ月後には

学徒出陣として戦線に立つことが決まった

その後も、徹男さんと私との関係は

一分一厘も進みはしなかった。

それに、もう、戦況が進むにつれて

国内のありさまは車輪のようにあわただしく

私の劇団の活動もやれなくなってきた

「もう、こうなったら、君たちは

文化活動などやっているべきでない」との先生の意見に従って

Mにある飛行機工場の計器部へ  
特別女子挺身隊員として通勤するようになった  
一週二回、研究会で顔を合せるだけで  
そのたびに徹男さんの私を見つめる眼つきは  
益々突き刺すようになるだけで  
それが私には、こわいような、憎らしいような  
そして、どこかで幸せなような気持がしながらも  
ただビシビシと日が過ぎた  
ああ、なんと言う日が過ぎたことだろう、なんと言う！

空襲、爆撃の音。

間もなく、空襲がはじまった！  
爆音とサクレツと火と死！  
私のM工場は、開戦後に新設されたもので  
ほとんど完全にカモフラージュされた工場なのに  
どんな方法でわかるのか  
まるでねらいうちをされるように爆弾を落されて  
吹き飛び、たたきつぶれ、燃えあがり  
そのたびに工員や挺身隊の者が  
五人、十人、三十人とケガをしたり、死んで行く  
それでも工場は閉鎖されない  
歯を食いしばって私たちは  
昨日死んだ仲間の肉片のこびりついた  
工具のハンドルにしがみ附いた。  
そういう毎日の中で  
私たちは日附けを忘れた

その頃の、ちょうど午の休けい時間に  
徹男さんが私を訪ねて来た  
あの人はいつもの学生服で  
珍らしく明るい微笑で立っていた  
二人は構内を堀に添ってユックリと歩く  
「何か御用？」と私は言ったが  
徹男さんが用事で来たのだとは思っていない  
あの人も何も答えず  
晴れた空の下をユックリと歩く  
そのうち、あの人がポケットから  
小さい写真を出して見せた  
G劇団の人からでも手に入れたのか  
舞台写真から私の姿だけを切り抜いたものだ  
「……どうなさるの、そんなもの？」

と私がいうと、フンと言ってそれと私の顔を見くらべてから  
写真をポケットにしまいこんだ

それから又しばらく歩いているうちに、不意に私はわかった

「ああ、いよいよ、入隊なさるのね？」

「うん、明日」

そうか、そうだったのか。

明るい明るい、すき通るようなあの人の顔。

空襲警報の音。

美沙子、走り出す。

舞台の四隅を走りながら、振袖①をとる。

そこへ、出しぬげにサイレンが鳴り渡り

警戒警報なしのいきなり空襲

アツと思った時には、空一面が爆音で鳴りはためき

キャンと――迫る小型機の機銃の弾が砂煙りをあげる

広場の果ての防空壕へ

途中で二度ばかり倒れた私を

あの人は抱えるようにしてかばいながら

斜めになって走って行き

防空壕の中に飛びこむと同時に

ドドドと至近弾の

音とも振動とも言えない落下

二人は階段の下の暗い所に

折りかさなつてころげ落ちて

そのまま死んだようになっていた

舞台上手奥にうずくまる。

振袖①を抱きしめている。

どれ位の間、そうしていたのか

時間はピタリと停つてしまつていた

気がつくと、あの人は倒れたままで

私の中からだをこんなふうにな、シツカリと抱きかかえ

私の耳のうしろの、この、えりすじに

ピタリとくちびるを付けている

爆撃はまだ続き、

空にはためく爆音と高射砲の響きと

揺れ動く地上の唸りは、遠くなり又近くなる

その中で、あの人の声が

はじめて聞く、こまやかな思いをこめてささやく

「……美沙子さん

ぼくは明日、行く  
国民のために戦う  
あなたのために戦う  
それは僕の望むところだ  
そのために僕の身がどうなるかと僕は悔いない  
僕は、うれしいんだ。

……

しかし、美沙子さん、  
今、恥かしい事を、たった一言だけ言います  
今迄こんな気持になったことはありません  
たった今、急に起きた気持なんだ  
こんな事を聞けば  
兄さんは僕を軽蔑するにちがいない  
あなたも軽蔑するにちがいない  
軽蔑されてもよい、言わないでは居られないのだ  
美沙子さん！  
僕は死にたくない」

ゆっくりと立ち上がる。

語りだすと同時に、振袖①を上手壁に戻す。

それだけでした

二人の間に、それ以上の事は何も起きず

空襲は終り、二人は別れ

次ぎの日に、あの人は入隊した

私は見送りにも行かなかった

私がい日でも半日でも部署を離れば

それだけ能率が落ちる

能率が落ちれば、出撃を待っている味方の戦闘機の装備が、それだけ遅れる

自分一人の理由で部署を離れてはならない！

かわいそうな、かわいそうな、美沙子！

バカな、バカな、あわれな美沙子！

舞台面に向かってゆっくりと歩く。

振り返り、衣桁にかかっている振袖③に向かって話す。

そして死んだ、あの人は

アツケないといっても、アツケない

それから二カ月とたたぬ間に

南方の基地へ運ばれて行く船が

向うの飛行機にしつこく追尾され

機銃の掃射を喰った時に



うたれて死んだ

その公報をにぎって、山田先生がじきじきに来てくださった  
忘れもしない、その時の空襲警報発令中の

人気がない応接室の片隅で  
いつもどおりの静かな顔で

しかし、どこかしら、いつもとちがった冷たく固い眼をなすって

「美沙子さん、徹男は戦死した」

と言って、そして、長いこと何も言われない

私の頭のどこかがブウンと鳴った

涙も出ず、悲しい気持もおきず

先生の顔をバカのように見守っていた

しばらくして、「僕の思いすごしでなければ

あなたの方は、とにかくとして、すくなくとも徹男のがわに、

あなたに対する何か細かい気持が動いているような気がした事が一二度ある。

それで、特にあなたには、この事を

僕自身でおしらせたいと思って、今日は来ました

差し出た、よけいな事だったら、おわびをする

あれの戦死については、今さら

かくべつの感慨はない

かねて覚悟していた事で、むしろ本望だったろう

ただ、戦場に立って兵士として一弾もはなたぬうちに、たおれた事は本人も無念だったろ

うと思う

僕らとしても、それだけが、残念だ」

先生の言葉は私にはわからなかった

私の耳にはその時、徹男さんの声がきこえていた

「……美沙子さん、僕は死にたくない」

その瞬間、よろける。

そのままの勢いで衣桁にしがみ付く。

ツト寄って先生が私を抱いた

気が遠くなり、私はたおれかけたようだ

そうでなくても仕事の過労と栄養不良のために

弱りきっていた私は、立っておれなかった

折からとどろきはじめた高射砲の音に

ジッと耳をすましながら

先生は私からだをグッと抱きしめて

「ねえ、美沙子君

いつになっても忘れないようにしよう

何が徹男を殺したかを

何が、われわれから、あれを奪ったかを……」

衣桁にかかった振袖③を先生に見立て、抱かれる。しかし、視線は上手の振袖①に向けられている。

徹男さんのような気がした

徹男さんの匂いがした

なまぐさい匂いの中で

私の乳と腹と腰が

先生の胸と腹と腰にピッタリと押しつけられて

ジットリと冷たい汗のようなものを流し

最初の男を感じていた

見も聞きもせぬ無感覚の中で

はじめて、男に全部をまかせていた

――女のからだの悲しさと恐ろしさ

開かねばならぬ時には開かないで

開いてはならぬ、開いてもしかたのない

自分で知らぬうちに開く花か

徹男さん戦死の報を受けたばかりの

あの空襲のさなかに、あさましい！

いや、いや、あさましいと思っただのはズツとあとだ

その時はただ先生の腕の中で

徹男さんに抱かれていた

ほかに言いようはない、そうだ、

先生の腕の中で、徹男さんに抱かれていた

おかしな、おかしな、おかしなこと！

布が裂かれる音とともに、振袖③を引っ張る。

すると、振袖③が半分にちぎれる。

振袖③の下には何も無い。

衣桁の後ろにある椅子に座る。

何事もなかったかのように淡々と語りだす。

それからの四カ月あまり、私は

気がちがったように働いた

空襲はますます激しくなって

工場は吹き飛び、人々は死ぬ

私の血走って、すわってしまった眼の前には

いつでも徹男さんが来て坐って

「待っている、待っている」とばかり

あの人の仇を打つような気で働いた

そうだ、ホントに私は気がちがっていた

死も生も爆弾も血も

私をおびやかさなかった

私は白熱しきって凍りついてしまった炎であった。  
そこへ終戦が来る

終戦。――世間では終戦と言う  
日本語のおかしさと、そんな日本語を使って  
自分の神経をごまかしている日本人  
恥じるがよい

それは敗戦であり、降伏だ  
私どもの工場の火は消え、物音は止む  
しばらく前から工場では降伏の噂がひろまっていたから  
八月十五日は、かくべつ意外な気はしなかったが  
それでいて、いよいよそうなった瞬間に  
思いもかけない深い影と静けさをともなつて  
それは私たちの上に落ちて来た  
人々は抱き合つて泣いていた  
また、人々は茫然として空を仰いでケラケラと笑っていた  
もつと深く傷ついた人たちは泣きも笑いもせず  
自分の眼の前をジッと見ていた

舞台上に散乱しているものを片付けて、楽屋にはける。  
録音でセリフが流れる。

次ぎの日から私は寝こんでしまった  
一人きりのガランと何もないアパートの部屋に  
泥のようにコンコンと私は眠った  
半月ばかりして起き出してからも  
私の頭はなんにも考えられなかった  
しばらくすると貯金がなくなる  
持ち物を次ぎ次ぎと売っては食って、  
今はもう着ている物以外に何一つ残らぬ  
食う物がなくなれば水だけで三日位は動かずにいる  
私の日々はウツラウツラと  
ただ白い紙のように過ぎた。

衣桁を山田家の玄関に見立てて。  
衣桁をくぐる。

だから、戦争が終つて三カ月たった秋の末に  
私が山田先生の内を訪ねて行ったのにも  
かくべつの目的が有るわけではなかった  
山田家の空気は以前とチツトも変らない  
「ずいぶん痩せたわねえ。でも、まあお元気でよかった」と  
出て来た奥さんも子供さんも

前と同じに明るく人なつこい

先生の書齋に通されると、先生は笑って振り向いて

「美沙子君か、どうしていた？」

「なんだか顔色が悪いが、どうかしたの？」

「はあ、いいえ別に――」と私が答えると

先生は深くも問いかけず

そこに前から来ていた四五人の客の話の中へ戻られた

ソツと坐って見まわすと書齋も以前と同じだし

来客たちの様子も以前の研究会に似ている

ただそこには徹男さんが居なくなっただけだ

妙な気がした、私は何か夢を見ていたのだろうか？

そのうちに、私にだんだんわかって来たことは

すべてが以前と全く同じでありながら

すつかり変ってしまったと言うことだ。

「しかし、地区の組織を確立する前に  
戦争中の個々人の戦争協力という

非常にデリケートな問題が出て来ますよ

本部ではそのへんをどんなふうに考えているんですかね？」

「そりゃ、まったく、そうだ

たいがいの人が戦争中それぞれの形で

最低の抵抗線をどこに引いて、

どんな方法でそれを守るかという事では

みんな苦しんで来ているんだからね。

さしあたり僕なんぞも厳密にいえば

戦争協力の責任をまぬがれない」

ハッとしたり、私は！

死んだ兄を思い出した、死んだ兄の言っていた事を思い出した

全部いっぺんにわかって来た

この人たちは左翼の人たちだ

すると先生は？ 山田先生は？

いや、先生はもともと左翼だったのだ

え？ すると？ しかし？

責任はまぬがれないとの言葉が良心的であればあるほど

もう既に許されて、責任をまぬがれている者が言っているように聞えるのか？

その言い方が率直で誠実であればあるほど

なぜこんなに卑屈な、オベツカじみた、弁解のように響くのだろうか？

次第に私のからだの中で渦のようなものがめぐりはじめて

静かに静かに目まいが襲って来て

自分がどこに居るか、わからなくなった

バラバラバラと私のうちで飛び散って  
こわれ、流れ、ぬけ落ちて行くものがある  
とどめを刺されて、  
キャフン！ と息の絶えたものがある  
それを見ていた  
私はそれを見ていた

舞台が暗くなる。

衣桁をくぐるとそれを手に持って、舞台面まで移動させる。  
衣桁の裏側に、照明が仕込まれていて、スイッチを入れる。

ヒョイと気がついて我れに返ると  
だまって先生たちにお辞儀をして玄関に出て  
ヨレヨレの運動ぐつをはいて外に出た  
遠い、遠い所を歩いているような  
寂しいような、スーッと、おだやかなような  
どこにも何のサワリもないような気持がした。

川のふちに出た。  
川のふちの小道を

水の流れの方向にスタスタと歩いた  
その川は、これまでに、たくさんの人を命を呑んだ川  
そうだ、あの時私も飛びこんでもよかった  
しかし不思議なことにその時はそんな事は考えつきもしなかった

生きるとか死ぬとかの、もつとズツと向うの方へ歩いていて  
川は、畑や林や森かげを縫い

ポツリポツリと家々の影をうつし  
秋の終りの人声と物音をひびかせて  
まだ暮れきらぬ夕空を映して  
たそがれの東京の町なかへ流れ入る。  
流れと共に私も町なかへ入る

川も私も何も考えない、何も感じない  
水がだんだん暗くなって来る  
私の姿もだんだん黒くなって来る。

どのへんだったか、おぼえがない  
しばらく前から聞こえていた足音が近づいて  
「おい君、どうしたんだ？

そんなにヒョロヒョロして歩いていると  
たおれて川へおっこちるぜ」

声に振り向くと、ヨレヨレの復員服と  
アカづいて青黒い顔色で明らかに  
復員したばかりの男が立っていた  
答える気にならず歩き出すと

ゆっくりとついてくる  
やがて

「よかったら、これ食わないか  
遠慮しないでいいよ

これ食ったからって代をくれとは言わん  
ひもじい時あ誰だって同じこったもんなあ

へへ、第一、こいつは俺にしたって、かっぱらって来たもんだ  
恩に着なくたっていいよ

お互いに、敗戦国のルンペンじゃねえか。

しかし無理に食ってくれと言うんじやない、いやかね？」と言って、  
パンを引っこめそうにした

その時、どうしたわけか私は手を出して  
さらうようにしてコッペパンをつかみ取ると

黙って、いきなり、それにかぶりついて食べはじめた  
味もなんにもないゴリゴリのパンを。

男はべつに笑いもしないで

自分も自分のパンを噛み噛み歩き

そうして二人は暗くなった町中に入った

柱に括りつけてあるカーテンを引く。

舞台全面が写幕に包まれ、影絵になる。

左手に巻かれている黒紐をほどこきながら、

その夜は私はドロドロに疲れはて

ある盛り場のガードのそばの掘立小屋に泊った

そして男といっしょに寝て

なんの喜びも、なんの悲しみもなく

からだを彼に与えた。

彼がそれを要求したのでもなく、私が求めたのでもない

綿のようにくたびれ切った二匹の犬が

からだを寄せて寝たというだけ

彼は五分の後にはスースーと眠ってしまい

そして翌朝私が目をさまして見ると

残りのコッペパンを一つと、金を六十円、私の枕もとに置いて、居なくなっていた

それきりあの男は私から消えてしまった

あれは、まるで風のような男だった

風は私の頬を吹きすぎて

なにもかも執着しないおだやかな冷たさで

どこかを今でも歩いている……

カーテンを男たちに見立てながら、官能的にカーテンを開けていく。  
黒紐は懐にしまう。

その次ぎの夜から私は、そのガードの下に立った男が寄って来る時もあるれば来ない時もある

男たちは私を妙な所へつれて行く  
焼跡の草むらに導いて

いきなり、ねじたおす男もいる

金をくれる男もあれば、くれない男もある

中には前の男のくれた金をソックリ奪って行く男もあった  
すべては私にとつてどうでもよかつた

頭が完全にしびれたようになってる

山田先生の書齋で話を聞いているうちに

電気がショートでもしたように頭の中を紫色の光が走って

ヒューズが切れて飛んだ!

それ以来、頭の中が、こわれてしまつて

なんにも考えられなかつた。

おかしなことに、そうして二カ月ばかり

いろんな男たちを相手にしている間に

どの男にもまるで興味は持っていないくせに

ホンのすこしずつだけけど、私の中から喜びを知って来たことだ

女のからだというものの下劣さ!

いえ、人間の肉体というもののキタナサ!

しかし、それもどうでもよい事だ

ここまででカーテンをもとに戻す。

衣桁を元の位置（舞台奥）に移動させる。

舞台奥に置かれてる振袖④を衣桁にかける。

だから、それから間もなく私が

ストリップパーになつたのも、すべてが偶然で

なろうと思つてなつたのではない

ガードの下で会つた男たちの一人に

アルコール中毒の男ダンサーあくずれが居て

私にダンサーになることをすすめた

舞踊の基礎と、発声法は

G劇団にいる頃に本式に習つてある

ただストリップ小屋の踊りや唄は、それとは違う

ただ音楽だけはわかるので、ただそれに合せてデタラメに

踊つたり唄つたりしただけ

ところが私のその頃の、何がどうなつても同じ事と言つた気持が

唄にも踊りにも投げやりな變つた味をつけるのか

舞台に立つたその日から人氣が立つて

三カ月の後には、それでけっこう一人前のソロ・ダンサーになつていた

私の暮しは楽になり、母にも金が送れるようになる  
レヴェ小屋でもらう給料は僅かだが  
いろいろの所からお座敷がかかる  
パーティやキャバレのアトラクションの仕事がある  
あちらこちらパトロンが附いて  
気が向けば、あのパトロンや、この客と  
ホテルに泊り、温泉に遠出する――  
間もなくレヴェ小屋のつとめはやめて  
このクラブのソロ・ダンスアに契約し  
きまった仕事はそれだけで、あとは好き勝手に飛び歩  
きが附いた時は私という者は  
表はダンスアの、実は高級パイになっていた  
ただズルズルと何も思わず  
ズルズルとドブドロの一番底に沈んで行き  
沈んだ自分を、自分でふみにじりたかっただけ

フツと我れに返ってニッコリ笑う。  
冒頭に流れたダンス音楽。

とうとう言っしまいました  
あなた方の前で趣味の悪い、  
言うまいと思っていたのに、ツイ言っしまいました  
そのままで行けば、すべてがそれで過ぎたでしょう  
金持ちの男を選んで結婚でもするか二号になるか  
案外に、普通に幸福に身のおさまりを付けていたかも知れませ  
んなぜなら、そうしていても、徹男さんのことも兄のことも  
先生のこと、めったに思い出しもしなかった  
ですから、それから半年あまり過ぎて  
なんの気もなく通りかかった或る講堂の表に出ていた  
左翼関係の講演会の立看板に  
山田先生の名を見つけ出して、それを聞いて見る気にヒョイとなりさえしなければ  
こういう事にはならなかった  
くやんでよいか、喜んでよいか、悲しんでよいか  
いまだに私にはわからない

講演会の音。

切符を買って中に入ると  
共産党の人がしゃべっていて  
それがすむと山田先生が出てきた。  
久しぶりの先生の顔はツヤツヤと輝いていて  
なつかしいような、うらめしいような



前の人の背中のかげにかくれるように身をちぢめ  
私はドキドキと先生を仰ぎ眺めてばかりいて

初めの間は先生の話がわからなかった

そのうちにだんだんわかって来た

先生らしく、一方で学者としての冷静な数字をあげながら  
それでいて美しい詩の朗読でも聞くように

人をマヒさせて一方の方へ引きずって行くところがあった

論証のしかたも言葉使いも完全に左翼のもので

鋭どく熱があった。

今日の先生は既に疑いようのない左翼の理論家で

テキパキと確信に満ちていた。

聞きながら私は死んだ兄の顔をマザマザと思い出していた

(手紙を取り出し、兄さんに話しかけるように)

兄さん、兄さん、なつかしい、かわいそうな兄さん！

あなたが昔、私に教えてくれたので

今私は山田先生の話を理解することができなのです

そしてそれは私の幸福ですか、不幸ですか？

兄さん、私は泣きたくなります。

(徹に話しかけるように。振袖①に向かって)

かわいそうな、恋しい徹男さん

私は今、こういう心と、こういうからだになって

あなたの兄さんの講演を聞いています

あなたの兄さんは、戦争中に、

右翼の国内革新論の講演をなすっていたのと同じような熱と火と美しい言葉で

左翼の論説をなすっています

あなたは戦争中の兄さんの理論に引きずられ、信じ切り、悔いを知らずに出征し

そして今あなたの骨は、どこかの海の底の岩かげに横たわっているの？

そうして私は、こうしてからだも心もくずれこわれて

腐れかけて坐っています

何かいうことがあった徹男さん

カタカタカタと骨と骨とを打ち合せて

私たちの前におどり出ていらっしやい！

こうなった私と、しゃべり立てているあなたの兄さんの前に！

ちきしよう…ちきしよう、ちきしようッ！

人も自分もまっくろになり

ドクンドクンと胸いっぱい脈を打ち

耳が聞こえず、目が見えなくなったまま

どれくらいの間、私は坐っていたのだろう

気がつくとき、そこらいちめん息苦しく

私は息がつけなくなり、チツソクしかけていた！  
山田先生の声はまだつづいていて  
とにかく、私は息がつけない、苦しい  
兄さん、徹男さん、助けてください

振袖①に縋りつく。

振袖①を抱きしめたまま、うずくまる。やがて、

——なんだって？

ああ、そうか

立ち上がり、振袖①を羽織る。

そうだ、お前さんといっしょの空気を吸っているわけには行かないんだ私は  
お前さんといっしょに呼吸してはおれないのだ私は  
お前さんが生きている世の中で私は生きておれない  
私は死ぬのは、まだイヤだ  
お前が死ぬ。

……………

(凜と正面に立って)そして、私はあの男を殺す気になっていたのです

さまざまな自然音が混ざりあいながら流れる。

(川のせせらぎ、風、鳥のさえずり、蟬の声、虫の声など)

その音は徐々に大きくなっていき、「もう、しかたない」の前でカットアウト。  
黒紐を取り出し、腰ひもとして使う。

それから一週間、クラブもお座敷もパトロンも、みんなことわって  
アパートのベッドで毛布を頭からひっかぶり  
考えに考えぬいた

山田先生、お前さんは生かしておけないのだ  
しかし待てよ

こんなふうにあの男を憎んでいる私の憎しみそのものが  
まちがった所から生れたものではないだろうか？

山田先生が私に対して何か悪い事でもしたのか？

あの人は誠実だ、正直だ、善良だ  
転向したのも転々向したのも

ギリギリいっぱい追いつめられて、やむを得ずした事で  
人をだまそうと思ったり、自分一身の利益を得ようと思ったためではない  
それに世間には転向者はいくらでもいる

戦争中に右翼に行つて戦争に協力し

私や徹男さんや、たくさんの国民を

戦争に向つて煽り立てたことにしても

あの人だけに罪が有ろうか？

煽り立てられた私たちにも半分は責任がある

いいえ、むしろ私たちのダラシのなさが

あんな指導者を生み出したのだ

敗戦後、あの人再転向の姿を見て

信ずべきものの一切を失い、錯乱し、虚脱して

こうしてダラクの淵に沈んだのも

すべては私がダメだったからだ、すべては私一人の問題だ

あの人をとがめる資格は私にない

とがめるならば私は私自らをとがめなければならぬ

そうだ、それはそうだ、わかっている、知っている

知っただ、そんなにそれはしっけていても

私はお前さんを生かしておけないのだ。

だけど待て

そんな事をして何になるのだ？

そうすれば徹男さんが生き返って来るのか？

又、世の中のタメにでもなるのか？

へ！ バカな事はやめるがいい！

転向といえはおかしげに響くけれど

考え方や生き方の、時々変らぬ人がどこに居るのだ？

転向は、実は成長かもわからないのだ

そうだ、しかし、そうだと

人間は変る、弱い、まちがいやすい

転向はしかたがない、許されてよい

転向者はそれでよいが、転々向者は許せない！

どんなリクツを持って来ても、どんな理由を持って来ても

これはドカンと私のうちに根をおろしてしまつて動かない

もう、しかたがない。

懐剣を手に取り、半分だけ刃を出す。

ムックリと一週間のベッドから起き出すと

母からもらつた短剣を出して見た

戦争中にトギ屋に出して研いである

突けば心臓を貫いて余りがある

青く澄んだ刃の奥に私の顔がうつっている

そこから覗いている眼は冷たく

静かに私の方を見ている

たしかに私は昂奮はしていない

自分でも物たりないほど落ちついていた。

お母さん、あなたのくれた懐剣で

私は人を刺すのです

許してください

あなたは一番大事なものミサオだといってこれを私にくれました

戦後の闇市のような雑踏音。

その翌日からお前さんを私はつけはじめた  
お前さんのしている仕事と、毎日の動静の全部を  
キレイに調べあげた。

お前のわきをスレスレに通り過ぎた女が幾人もいたことに気がついたの？  
お前のうしろに寄り添うて行った女がチヨイチヨイ居たのを

お前は、ただのパンパンだと思ったようね？

お前は夢にも知らないのだ

その時、私の右手がポケットの中で短剣のツカを握りしめていることを  
その気になりさえすれば好きな時に

ただ一突きでお前をたおす事ができることを

三カ月もの間、私がお前に手をおろさないのは、

お前を殺そうと思った自分の気持が

ホンの一時のものかどうかを、ためしたかった

殺してしまつてから、どんな意味でも、どんなカスカにでも自分が後悔しないか？

そんな事を、短剣をお前の背中に擬しながら

自分で自分に考えさせて見たかったからだ

それはない。たよりないほど、それはなかった

それが証拠に、お前を殺すことにきめた時から

私は食べる物がうまくなった

酒の味もおいしくなった

踊るのも唱うのも上手になったし、

男たちの腕の中でも、燃えかたが強くなった

からだだが、生れてはじめて、うずき走って、ふるえ出して叫んだのは

短剣をお前の背中にかまえて見た晩だ。

虫ケラをひねりつぶすように私はお前をやるだろう

今となって完全にお前の命は

私の手の平の中のオモチャだよ。

戦後を象徴するような音楽。

短剣を舞台面に置く。

ある日、私はおかしな事に気がついた

お前が外出する度に一度ぐらいの割合で

不意に自動車などに飛び乗って

それきり、どこへ行ったかわからなくなる事がある。

一度偶然にそういう時のお前をつけて見る気になつて

その夜はお前が輪タクに乗ったのを幸い

私も直ぐに輪タクに飛び乗ってつけさせた  
行きついた所は京橋裏の築地寄り

川に添った裏通りの

内部は空襲でこわれたままに

ガタガタと仕切って作ったアパートだった

お前は車をおりとキョロキョロと前後を見まわしてから

コソコソと、その建物に入って行き

一階の廊下の突き当りの左側の室のドアをノックしてから中に消えた

それを見ずまして私はすぐに入って行き

ドアの前に立って耳をすますと中で女の声が出て

それにお前が何か言っている

ドアのわきを見ると五号室とあって小さな名刺に田川と出ている

私はしばらくそこに立っていてからユックリ歩んで帰りかけたが

その時表から此処に住む人らしい人が入ってきた

トッサにどうしようと私は迷ったが、

見ると、直ぐわきに二階にあがる階段がある

腹をきめて、わざとユックリと落ちついた歩きかたで階段を昇った

人が見れば、二階に住んでいる誰かを訪ねて来た客に見えよう

昇りつめるとカギの手のおどり場になっていて

下の廊下からは見えないので、そこにしばらく立っていてから帰るつもりでフツと見ると

おどり場のわきの壁が焼夷弾でも受けた跡かポツカリと口を開けて

申しわけに二三枚の板が打ちつけてあるだけ

すかして見ると、その奥はまっくらで、天井裏になってるらしい

位置の関係から、それが今見た下の五号室の天井になってるようだ

頭にキラリと来るものがあった、よっぼど、その穴にもぐり込んで、

のぞいて見ようと思ったが、いくらなんでも出来なかった、天井のスキ間から

そしてその晩はそのまま戻ったが

ハナから知らねばなんでもなかったのが

なまじすこしばかり知ったために、よそうと思っても思いきれぬ

しばらく経ってアパートの管理人に会って遠まわしに聞いて見ると

「五号の田川さんというのは、そうですねえ

まあ顔役といったような方ですか

チョツとしたサギかなんかやって、今は刑務所に入っています

奥さんのもと新橋へんの小料理屋に出ている人で

現在は一人で暮して田川さんの帰りを待っていると言うわけだが

男の客がよく来ますよ

とにかく、まあ、うまくやっているんじゃないですかね

へへへ、そのへんの事は、よく知りません」

ゲスな老人のせせら笑いで

女の暮らしはいっぺんにわかった。

しかし、そんな女の所へ山田教授ともある人がなぜに来るのだろうか？

妙に知りたい。嫉妬のようなものが私の内に起きた

完全に自分の手に握っていて

どこの隅まで知りつくしていると思っていたお前さんが私の知らない所で、私の知らない事をしている

よし！ と思った。

その次の時、私は大急ぎでタクシイに飛び乗るやそのアパートに先まわりした。

今度は迷わぬ、まっすぐ階段を昇って行き、

そこらに人影のないのを見すまして

おどり場の穴の闇にスツともぐりこみ

ミシリとも音のせぬように用心しながら天井裏の横木をさぐって

息を殺して、こうやって、しゃがみこみ、下からの光でポツと明るい

天井のスキマから下を見る

思った通りに五号室らしいが

いきなり、ギョツとする真近かさで

いぎたなく、着物のスソをチラホラと股のへんまでのぞかせたまま

こうやって、若い女が眠っている姿

これがその女か？

顔はあまり美しくはないが、太りじしの伸び伸びとした良いからだ  
女一人の部屋の隅に脱ぎちらした着物があつたり  
枕元には食い捨てた皿小鉢やタバコの灰皿がそのままになっている

ここから腰をあげないで演技をする。

ときおり、ストリップ的な動作をいれる。

間もなくドアにノックの音がして

女がやつと眼をさまして返事をする

お前が入って来た。

吸いつくように息を殺してのぞいている私の眼の下で

お前が最初に何をしたか？

なんと、靴をぬいで上にあがるや、ものも言わず

眼をこすりながら、まだ横になった女の

ここからも見える、うすよごれた足の裏の土ふまずの所へ

いきなり顔を持って行き

鼻をふくらませてキッスをした。

すると女が、その足をボタンとわきにやって

「あんた、金、持って来てくれた？」

「う？ うん……」とお前は言つて又、その足にキッスした

びっくりして私は声を立てそうになった

お前は不意に気が狂ったのか？

それとも、それは実はお前ではないのか？

いつもの重々しく理智的な高貴な表情をなくして

又となく愚かしい、デロリとゆるんだ顔になっている

しかし、それから起った事のすべては  
さらに意外な事ばかりだった。

とは言つても、かくべつ、多くの事が起きたわけではないし、珍らしい事が起きたのでもない

世の中の男と女の間には、いつもある事があつただけというほかにスベのない事で  
私のような暮しの女には今更めずらくもなんともない

言つて見れば大昔からタイクツなタイクツなバカの仕事、

それでいて、しかしなぜだろう？ 私は下の部屋をのぞきながら

次から次と、びっくりして、何が何やらわからなくなり、カタズをのんでいた。

ただ動物のように淫とうな女

そのくせ、足の裏やエリあしなどにアカを溜めても気にもとめない無神経さで

男の下で、白いからだをムチのようにそらせながらも

実はなんの喜びも感じていない事は

目をつぶってダラリとした口のはたを見れば、私には、わかる

不感症だ。まるで不感の淫乱女。

ただ腰だけは、よく動く、波のうねりだ。

ねえ！ 待ってくれ！ たのむから！

胸を、もつと、開けて！ つかんでくれ！ ねえ！

白痴のような眼でポカンと壁の方を見ているお前の口のはたに

白いアブクになってヨダレが垂れていた

それにお前は気が附かなかった

山田先生！

いや、ホントにそれは山田先生なの？

あの高邁な思想家が、いつ、どうして、こうなったの？

あの男は奥さんと寝て、そしてあの女と寝る

どっちがホントで、どっちがウソだ？

きたならしいよ！

フ！ この私が人のことを、きたならしいだって？

そう、やっぱり、きたならしいよ！

そうだ、私はきたならしい、心もからだもインバイだわ

私の所に来る男たちも、犬のように吠えたり舐めたり這いずったり

スケベエの変態の、きたならしい動物だ

しかし、あの男にくらべれば、きたなくない

きたないという中身がちがう

あの女の所による時のあの男だけならば世間の男と同じだ

しかしその男が家に帰って又奥さんと寝た時のことを

あれとこれとをいっしょに考え合せていると

胃をつかみ出して塩水で洗つても

吐気がとれない位に、きたならしい！

ペッ！ ペッ！ ペッ！

ビックリしたのは、そのお前が

その翌日から多少は変わるかと思っていたのが

いったんそのアパートを離れると相変らずの山田教授で

誠実な顔をして進歩と人民民主主義を説き

清い家庭の良き夫、良き父として

人格高邁、微動だもせず以前と寸違わぬ姿でいることだ

これは何だ？ わからない。

わからないままに、私はますますお前の後をつけまわした

家から教室へ、教室から講堂へ、講堂から川岸のアパートへ、アパートから家へ、

グルグルと眼がまわり出したのは私の方だ

ホントに私の頭が狂ったかと思っただのは

それから間もなくだった

川岸のアパートにお前をつけて行って、天井に入っただけで

その晩は女が気が向かないか、

お前が犬のように哀願しても、身体を開こうとはしないので

お前は遂にメソメソ泣き出して

果ては横づらを突きこくられている時に

女の所に通つて来る、ほかの二三人の中の一人で

ゴロツキのような闇屋の男が入って来た

お前はたちまちペコペコとおじぎをして

脱いであったズボン拾って着ると

コソコソと部屋を出て帰った。

その次ぎの夜だ

神田の方で催される文化講座に、お前の講演もあることを知って

私は聞きに出かけて行った

お前は、そこで、いつもの通りに学者らしい素朴さでズカズカと出て来て、確信ある者の

落着きと、シュン烈さで

「平和と文化」について話した

私には議論が正しかろうとまちがっていようと、どっちでもよかった

私はお前の、紺のダブルに包まれた端麗な姿と

良心と熱意のために心もち上気した顔ばかり眺めていた

そのうちに前夜の川岸のアパートでベソベソ泣きながらズボンを拾っている

お前の姿を思い出した

すると急にムカッと来た、

がまんが出来ず、口をおさえて会場を飛び出して

しばらく小走りに行ってから、

とうとうゲラゲラ、ゲラゲラと笑い出した

すこしもおかしくないのに、笑いが止らない

ハハ、ハハ、ヒッヒ、ヒヒヒヒ、ハハ、ヒヒヒ！

夜の神田の大通りを、とめどなく高笑いしながら走る女を人は気がいだと見ただろう。

そうだ、いつの間にか、お前を軽蔑しちゃってる



軽蔑しちゃったものを憎むことができるものじゃない  
すると私は、お前をこのままに見のがして置けるのか？

いいや、ダメだ、今となつては、徹男さんと兄とが  
私がよすのを許してはくれない。

兄と徹男さんの二人は毎夜のように私の枕もとに現われて、私を眠らさない。  
なんでもいいから、よいかげんに、ひねりつぶせ！

それで、待った

もはや何も考えないで私は待った

その時は直ぐに来た

いよいよ今夜だ。

今夜の帰り途で決着をつける。

私はもう一度短剣のサヤを払って

澄み切った刃の鏡で自分の顔に最後に別れを告げてから築地へ急ぐ

梅雨どきのアパートの天井裏にナマぐさくカビが匂う

いよいよ今夜が最後だと思つと

そこにしゃがんでいながら、どういふわけか私は物悲しいような気持でいた

この前の事があつたためか、お前はほかの男が又来はしないかと、最初のうちはビクビク  
と

一度なぐられた犬が飼主に近づくように、女のきげんをうかがっていたが

その晩はどうしたのか、女の方がションボリしていて、

お前の出したサツたばにも手をふれようとせず、

片手を胸にさしこんでふさいでいる

どうしたの？ どうしたんだよ？ ねえ君

なめまわすようにお前が問いかけるのにも

女はしばらく答えなかったが

やがてボロボロ泣き出して「ジが出た」と言う

「ジ？」お前は何の事だかわからなかった

私にもわからなかった

それが、やつと痔だとわかつて、おかしい気持はちつとも起きないで

この女の白痴のような子供らしさに

胸のどこかをキリリと突かれたような気が私はした、

お前もチツトも笑わないで、心配そうな、むしろ急に元気になった顔をして

どれ、僕が見てあげる、手当はしているの？

ううん、薬は買って来たけれど、気持が悪いから、そのままにしてあんの

どれどれ、それはいけない、痛いのか？

そんなに痛みはしないけど、気持が悪い……

そしてお前はイソイソと、薬と綿を取って手当てをしはじめた

女をあおむけに寝せ、ひろげた脚の間をのぞくお前の顔が

なんと熱心でキマジメだろう！

それは、世界平和についての労働組合の任務を説き立てていた時の熱心さと同じで、

そして、あの時よりも、もっと真剣だった  
シロウト淫売の尻の穴をのぞいている山田教授よ！

あざけり笑おうと私はしたが  
頬がベソをかいたようになる

なんだか知らぬが、この男は、なんだか知らぬが、この女に惚れている  
おかしな、変てこな、きたならしいふうにだけど

たしかに、この女に惚れている

そしたら、どうしてそれが、おかしな変てこなきたならしい事だろうか？

バカのように、悪魔のようにのぞいている私の目の下で

お前は痔の手当てをすませると

手当てをしているうちから、既に釣りあがっていた眼つきで、

もうオスになったこんな手つきで

べつの所をまさぐりだしている

痔の痛みがおさまったせいか

又は痔の痛みがまだすこしあるためかも知れないが

不感の女が今夜は自分から腰を持ちあげて

珍らしく、とろけかけた薄眼を開いている。

眩しいほどの強烈な光が覗き穴からさす。

舞台にはただそれだけの光。

ゆっくりと立ち上がり、光の前に立つ。

あたしは、はじめて知った

男でも女でも、男が男であるものと女が女であるものと

ハイセツ物を出す所とが、すぐわきに隣り合っている

それまでだってその事を知らぬわけではなかったのに

だのに、はじめて私はそれをその時に知った

それには、何かがある

キタナイとかキレイとか、とだけではない

その事の中には、何か大事なことがある

何だかわからないが、何かがある。

節穴の中では、女の上にたおれたお前が

全く自分を忘れて、ふるえている

これが人間じゃないかしら？

ヒョツと思つた

人間はみな、こうじゃないかしら。

それぞれ自分だけの暗い穴の中で

人はみんな、おかしな事をしているのだ。

すると、明るい外で、人の目をかねてしている事だつて

やっぱり、あれで、おかしな事ではないのか。

両方ともが、両方をひっくるめて人間というものがそんなものじゃないのかしら。

お前の人格や暮しの事を二重三重四重と私は思ったけれど  
そのどちらもが、お前に取ってホントなのじゃないのか。

ここでそうしているお前も、ほかでああしているお前も、どちらもホントで、  
そういう人間がお前なんだ。

転向前のお前も、転向後のお前も、それから転々向した今のお前も、  
どれもこれもお前にとってホントだったのだろう

そういう人間でお前はあったのだ。

弱い、もろい、そして何かの手で気まぐれに作られた人間が  
生きて行くことに耐えて行くためには、  
誰しも実は、たいがい、そうではないのかしら？

お前は、ただの人間だ。

たぐさんの、ほかの人間と同じように、ただの人間だ。

それを、特別の人間みたいに思っていた

そのために私は腹を立てて、憎んだ、こんなに。

そうだった！

いいえ、あたしは、それでもお前を許しはしない

許しはしないが、憎むことは、もう出来ない

憎んではいるけれど、前のように憎めない。

殺してもよい、しかし、殺しても、つまらない

振袖④を衣桁から外し、地面に落とす。

満足し、ダラリとなったお前と女を、節穴の中に残して

私はションボリ、うちに戻って来た。

私のうちで、妙なことが起きてしまった

何かポキンと折れた

お前を憎み殺してやる気がなくなったら

それといっしょに、何か別のものまで折れてしまった

つかい棒がなくなった

自分がフラフラと宙に浮いているような気がする

べつに悲しいのでも苦しいのでもない

ただポカンとして、死んでもいいなと思ってる

だけど、なんだか、それもメンドクさい

間。

ゆっくりと冒頭のダンス音がかかる。

そんな深刻そうな眼でごらんくださる必要はありません

私は明るく自由で、自分自身からさえも解き放たれたのです

あの以来、私の夜ごとの夢に現われていた兄さんも徹男さんも、もうサツパリと出てこ  
なくなりました

私は泥のように、よく眠れるようになりました

私はこれまでのように頭痛がしなくなりました  
私は空に浮いたひとかたまりの雲のように自由です  
なぜならば、私はヤット人間を見つけたのですから。

ギリリと立ちあがって、ユックリと舞台面へ  
短剣を右手に逆手に持って、静かに力を入れながら

そんな次第で

お前さんは安心するがいい  
だけど、あんまり安心しすぎて、いい気になるのはよしなさい  
なぜならば、殺せないから殺さないのじゃない  
いつでも殺せるから、殺さないのだ

私はいつでも音もなくお前さんがたの後ろにピッタリくっついて歩いてる  
お前さんがたの背中には、いつでも、これが突きつけられている  
人間は、薄い袋に入れた三升ばかりの血液に過ぎない。

これでチョイと突っつけばタラタラとなんの苦も無く流れ出して、ドブ水になる。  
気をつけなさいよ！

くずれるような美しい媚笑。  
舞台中央に懐剣を置く。

……………といったようなお話ですの  
ホントだと思ってくださいっても、  
ウソだと思ってくださいっても  
どうぞ御自由に

着ているものを脱いで脱いで脱ぎ切って  
ご存じのストリップ！

黒紐、兄の手紙、振袖①を順に捨てていく。

舞台奥の楽屋に続く黒幕を開ける。

その奥には鏡が置かれていて、観客を映している。  
鏡には白い薄布がかかっており、それを手に取り、羽織る。

さて、皆様はこの先の人生で、何を脱ぎ捨て、何を着るのでしょうか。  
私の話はこれでおしまいでございます  
ありがとうございます。  
ありがとうございます。

光に包まれた鏡の中に、緑川美沙は消えていく。

幕

